

Y-PAC journal vol.4 サッカーにおける“スペース”

Text by sho murakami

僕がサッカーに興味を持ち始めたのは98年W杯、この頃は日本が初めてW杯に出場した年でもあり、世間的にも注目されていた。この頃から僕はオランダ代表の虜になった。特に準々決勝のアルゼンチン戦でのベルカンプの決勝ゴールは鮮烈だった。

サッカーの基本は「スペース」を作ることであると思う。美しいプレーをするチームの美しいゴールは、それぞれのプレイヤーがアイコンタクトによってコミュニケーションをはかり、スペースを作る動き、スペースに入り込む動きによって生み出される。

1974年W杯、ヨハン・クライフを中心としたオランダ代表は、ポジションに縛られないそれぞれの選手が連動してポジションチェンジを繰り返すトータルフットボールを展開し、チームを準優勝へ導いた。トータルフットボールは今までのポジションにおける個々の役割が重視されてきたサッカースタイルを大きく変える。このトータルフットボールによって、サッカーのフィールド上における「スペース」の考え方の基礎が確立されたと断言してもいい。現に、トータルフットボールは現代サッカーに多大な影響を与えた。前線からの複数のプレッシングとオフサイドトラップを組み合わせ進化させたゾーンプレスは、選手が自由にプレーする「スペース」をいかにして消し去るかを考えた戦術であり、また現在、主流となっているポゼッションフットボールは、後方や中盤でボールをキープしている間に、FWを始めとする前線の選手がいかに有効な「スペース」を作り出せるかがその戦術の目的である。どちらもトータルフットボールが生み出した「スペース」に対する考え方から派生したものである。

後のオランダ代表は、このトータルフットボールを継承し、体現していると思う。80年代後半から90年代初頭にかけては、ライカールト、フリット、ファンバステンというオランダトリオが、当時所属していたイタリア、ACミランの黄金期を作り上げる。代表でも88年欧州選手権(EURO88)、ファンバステンのEURO至上最高のゴールと称される伝説のボレーで優勝を勝ち取っている。

サッカーを芸術とたとえる例も少なくはないが、その洗練されたコラボレーションによって生み出されるプレーは、美しいデザインのようなものである。先月行われたEURO2008のイタリア戦でのオランダ代表のスナイデルのゴールはまさに芸術である。最終ラインから、ジオ、カイト、スナイデルが連動してスペースヘノンストップで走る、まさにザ・カウンターアタックである。カイトがヘディングで落とした後のスナイデルのボレーのインパクト時、一瞬時間が止まったかのように感じた。いや、あのゴールはやばい。

最後に、余談ではあるが最近若手建築家の間でサッカートークが熱く交わされているという。それは日韓W杯が開催された2002年から毎年、建築関係者のためのサッカー大会「A-CUP」を行っているほどである。ちなみに優勝トロフィーはミス杯と呼ばれ、H型鋼でできているらしい笑。しかしこれは偶然なのか。もしかしたら、建築を考える上での身体性、空間、またはチームとしての組織的な観点から、サッカーに通ずるところがあるのかも知れない。

July 24, 2008